紀伊國名所圖会

三編　四之巻下

高野山

ル 4
325
15

門 ル 4
325
巻 15

○四所庄官　高坊　田所　岡　亀岡　此四家ハ大師御

両親阿刀佐伯両家の苗裔なり寺領政務の[illegible]讃州ら

ゟ慈尊院村ゟ移住しとゝ然るゟ天文の洪水ゟ散在し

て今ハ入御名倉中飯降の三村ゟ分處を

○勝利寺（同村七社明神の坤ゟ）

本尊十一面観音ハ衆生除厄の為ゟ大師四十二歳ゟして

彫刻し給ふ尊像よして霊験の験ゝ多し　観音冥應集

ゟ[illegible]又本國湯浅權守宗重癩風を憂ひし時ハの

尊と行ゝて平愈ゝる事縁起ゟ詳なり　什宝の中千栗

陀境と云ふ古境一面大師兼求して毋公ゟ贈ゝる所と云

傳ゟ表ゟ三尊の弥陀あり背面ゟ鹿と鶴と人物あり其

余古器數種を蔵を

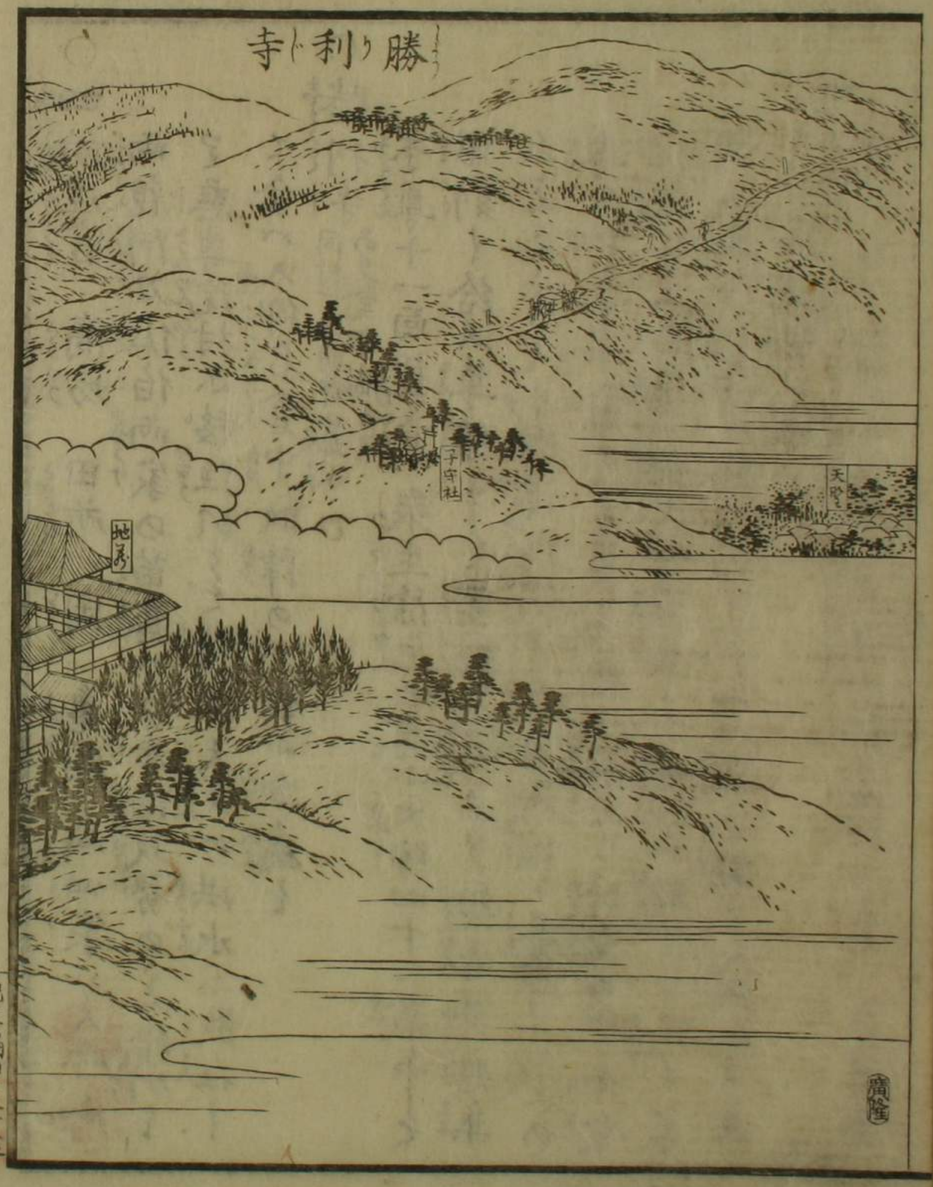
續千載爵旅

宮あなさうれ世の中くまりぬまびいづくも旅のゝ地こそ十まを

高野法親王道法

井函

観音


勝利寺
地蔵

同　哀傷　従一位貞子名まうる費をうる歌山ときそとうれのくそとありへば　法印憲基

○擂蒔石　勝利寺より二千丁汁大師
　　ゆきまきいし　　しりとりてら　　にせんちょう　　だいし
　　ゆきまきいし　　しりとりてら　　にせんちょう　　だいし
　　ゆきまきいし　　しりとりてら　　にせんちょう　　だいし
○雨壺山　山上ふ登る二汀除ふの壺あり方一尋ばかりの盃
　　あまつぼやま　　やまのうえ　　のぼる　　にていのぞく　　つぼ　　かた　　ひろ　　さかづき
　　あまつぼやま　　やまのうえ　　のぼる　　にていのぞく　　つぼ　　かた　　ひろ　　さかづき
○追分　町ふ道と天野との追分あり雨つぎよう　例年四月五穀成就の祈あり法人那
　　おいわけ　　まちふみち　　あまの　　おいわけ　　あめつぎよう　　れいねん　　ごこくじょうじゅ　　いのり　　ほうにんなし
　　おいわけ　　まちふみち　　あまの　　おいわけ　　あめつぎよう　　れいねん　　ごこくじょうじゅ　　いのり　　ほうにんなし
○八町坂　二十丁糸巻の院より追分まで五十町　名木櫻　坂の顔
　　はちまちさか　　にじゅうちょう　　いとまきのいん　　おいわけ　　ごじゅうちょう　　めいぼくさくら　　さかのかお
　　はちまちさか　　にじゅうちょう　　いとまきのいん　　おいわけ　　ごじゅうちょう　　めいぼくさくら　　さかのかお

天野　此地ハ山蛮環合して別ふ二區をふ〻し上不二村ふ〻る〻ふ〻四所明神の坐まと
　　あまの　　ここちは　　やまばんかんごう　　べつぶ　　にくをふ　　しょうふ　　むらふ　　しょめいじん　　ざま
　　あまの　　ここちは　　やまばんかんごう　　べつぶ　　にくをふ　　しょうふ　　むらふ　　しょめいじん　　ざま
　　以て旧跡やとも〻〻八千坂より下て明神へ詣し二つあり各へ出るあり
　　もってきゅうせきやとも　　やちさかより　　くだって　　みょうじんへ　　まいり　　ふたつ　　かくかく　　でる
　　もってきゅうせきやとも　　やちさかより　　くだって　　みょうじんへ　　まいり　　ふたつ　　かくかく　　でる
　　無事五十余年の祈年あり式社なり国社　祀神四座
　　ぶじ　　ごじゅうよねん　　きねん　　しきしゃ　　こくしゃ　　しじんよざ
　　ぶじ　　ごじゅうよねん　　きねん　　しきしゃ　　こくしゃ　　しじんよざ

天野神社
　　あまのじんじゃ
　　あまのじんじゃ
一宮　正一位勲八等丹生津比賣大神　一祝惣神主丹生一磨
　　いちのみや　　しょういちいくんはちとうにうつひめのおおかみ　　いちしゅくそうかんしにういちま
　　いちのみや　　しょういちいくんはちとうにうつひめのおおかみ　　いちしゅくそうかんしにういちま
延喜式云　　当社の神事を司る
　　えんぎしきいう　　とうしゃのかんじを　つかさど
　　えんぎしきいう　　とうしゃのかんじを　つかさど
丹生津比賣神社　名神大　月次　新嘗　相嘗
　　にうつひめのかみのやしろ　　めいじんたい　　つきなみ　　しんじょう　　あいじょう
　　にうつひめのかみのやしろ　　めいじんたい　　つきなみ　　しんじょう　　あいじょう
三代実録云
　　さんだいじつろくいう
貞観元年正月　廿七日甲申紀伊國従五位下勲八等丹
　　じょうがんがんねんしょうがつ　　にじゅうしちにち　　きのえさる　　きいのくに　　じゅうごいのしたくんはちとうにう
　　じょうがんがんねんしょうがつ　　にじゅうしちにち　　きのえさる　　きいのくに　　じゅうごいのしたくんはちとうにう
生津比賣神授従四位下元慶七年十二月　廿八日庚申
　　にうつひめのかみじゅじゅうしいのしたげんけいしちねんじゅうにがつ　　にじゅうはちにち　　かのえさる
　　にうつひめのかみじゅじゅうしいのしたげんけいしちねんじゅうにがつ　　にじゅうはちにち　　かのえさる
紀伊國従四位下勲八等丹生津比賣神授従四位上
　　きいのくにじゅうしいのしたくんはちとうにうつひめのかみじゅじゅうしいのうえ
　　きいのくにじゅうしいのしたくんはちとうにうつひめのかみじゅじゅうしいのうえ
山史云
　　やまふみいう
寛平九年丁巳冬十二月鎮守大明神被授従三位
　　かんぴきゅうねんていみのふゆじゅうにがつちんしゅだいみょうじんひじゅじゅうさんい
　　かんぴきゅうねんていみのふゆじゅうにがつちんしゅだいみょうじんひじゅじゅうさんい

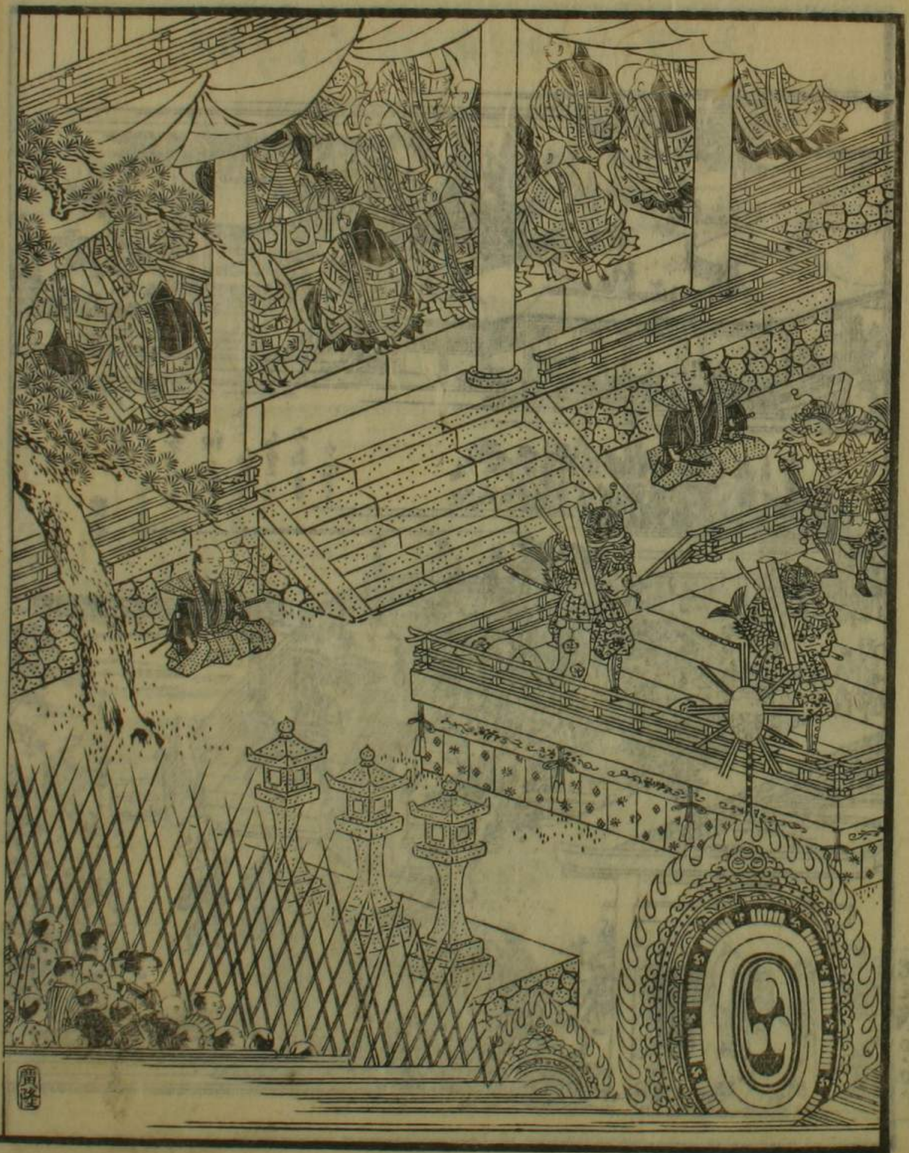
淳方勘状云
　　じゅんぽうかんじょういう
天暦六年五月奉増一階又云永治元年七月奉増二階
　　てんりゃくろくねんごがつほうぞういっかい　　えいじげんねんしちがつほうぞうにかい
百錬鈔云
　　ひゃくれんしょういう
寿永二年十月九日紀伊國丹生高野神奉加一階
　　じゅえいにねんじゅうがつここのかきいのくにたかのかみほうかいっかい
宝蘭集云
　　ほうらんしゅういう
寿永二年十月十六日勅正二位丹生明神今奉授従一
　　じゅえいにねんじゅうがつじゅうろくにちちょくせいにいにうめいしんいまほうじゅじゅいち
　　じゅえいにねんじゅうがつじゅうろくにちちょくせいにいにうめいしんいまほうじゅじゅいち

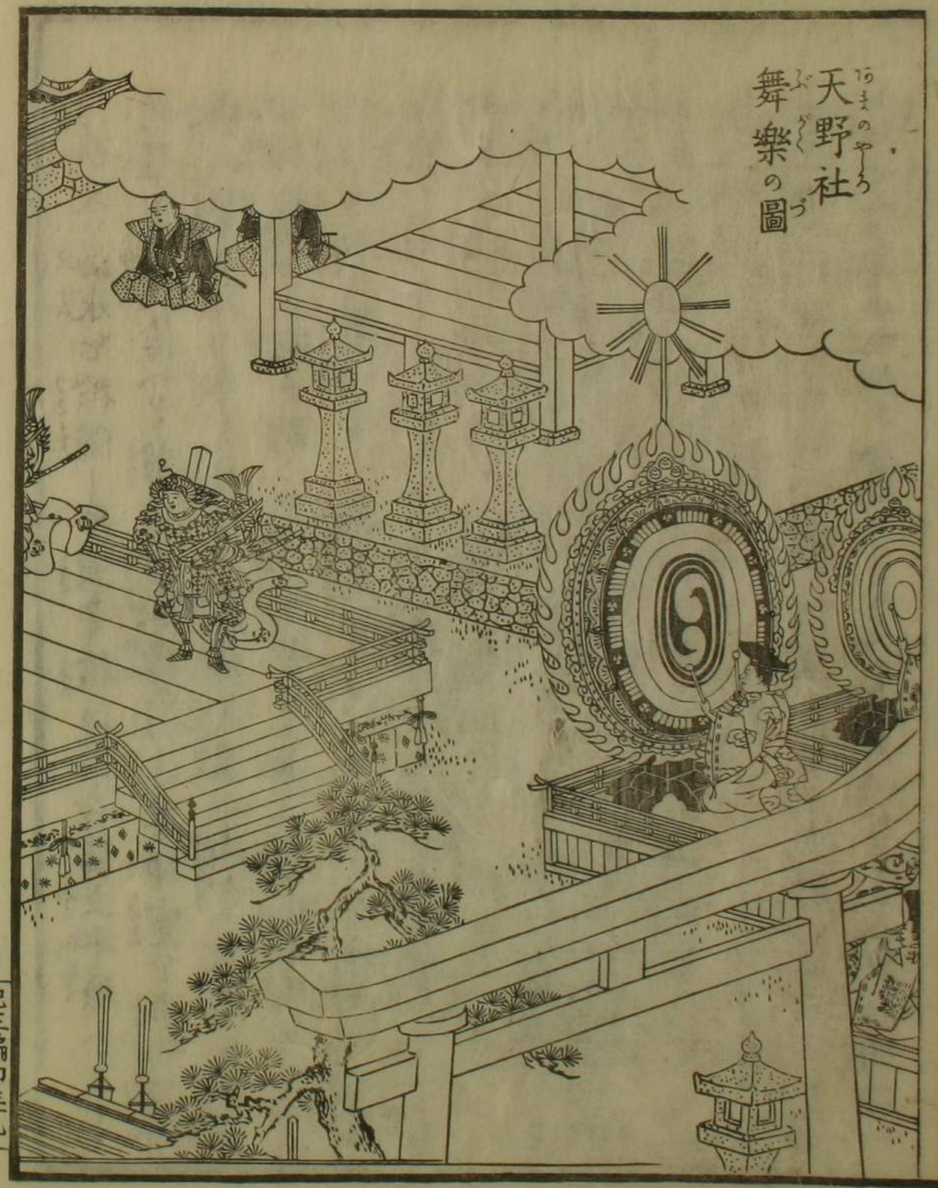
位
　　くらい

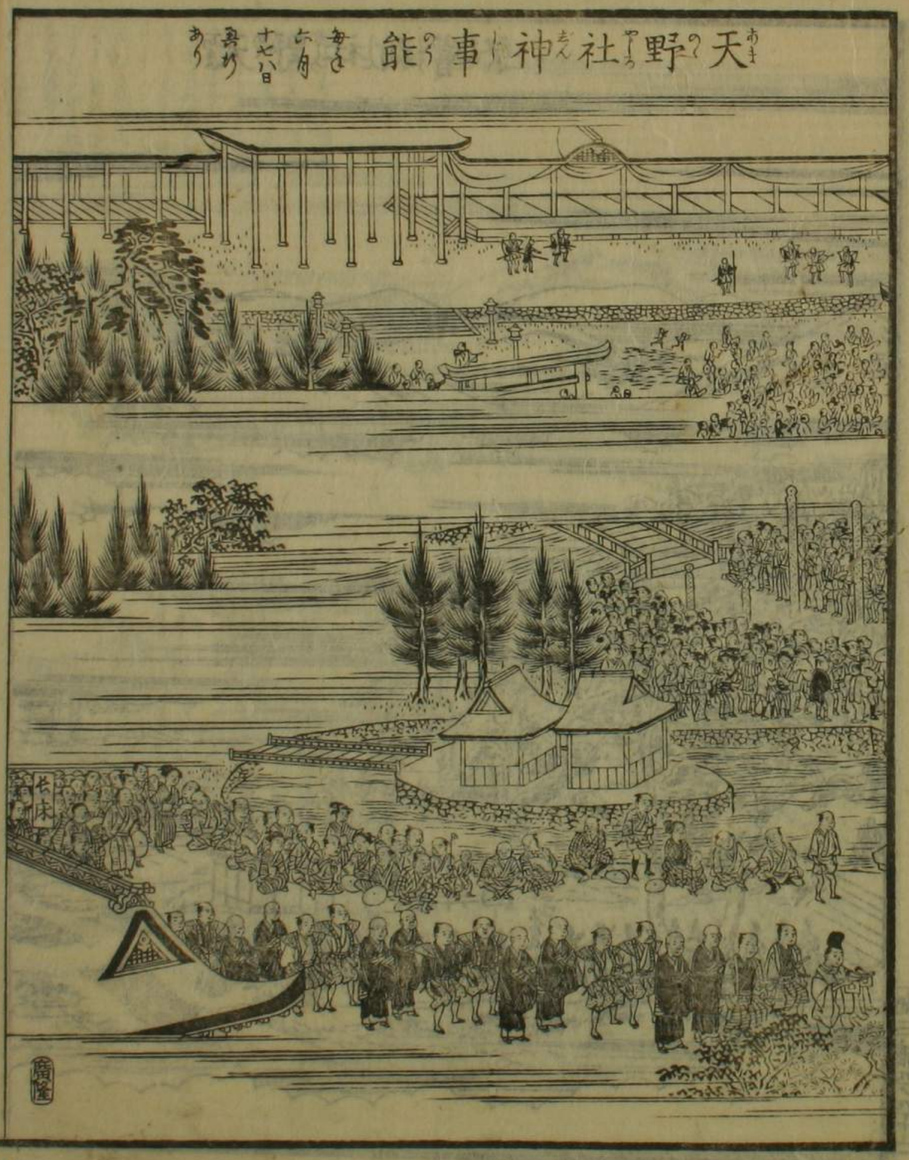
二宮　正一位丹生高野御子大神　二祝子丹生相現某
　　にのみや　　しょういちいにうたかのみこのおおかみ　　にしゅくしにうあいげんぼう
　　にのみや　　しょういちいにうたかのみこのおおかみ　　にしゅくしにうあいげんぼう
三宮　氣比大神　三祝子丹羽某当社の神事を勤ひ　当社の神事を勤ひ
　　さんのみや　　けひのおおかみ　　さんしゅくしにうのぼうとうしゃ　　とうしゃのかんじを　つとめ
　　さんのみや　　けひのおおかみ　　さんしゅくしにうのぼうとうしゃ　　とうしゃのかんじを　つとめ
四宮　厳嶋大神　四祝子松嶋某当社の神事を勤ひ
　　しのみや　　いつくしまのおおかみ　　ししゅくしまつしまぼうとうしゃ　　かんじを　つとめ
　　しのみや　　いつくしまのおおかみ　　ししゅくしまつしまぼうとうしゃ　　かんじを　つとめ
末社九十二王子社　満離の内九右ふ有り左八五神合殿右八六神合殿　百七
　　まつしゃくじゅうにおうじしゃ　　まんりのうちくうゆうふあり　　さはちごしんごうでんうはちろくしんごうでん　　ひゃくしち
　　まつしゃくじゅうにおうじしゃ　　まんりのうちくうゆうふあり　　さはちごしんごうでんうはちろくしんごうでん　　ひゃくしち
番神社　日右ふ有り　行勝上人の社なり上人終焉の地ふて丹生一の祝子ふて湯を浴て曰ふ
　　ばんじんしゃ　　にちうふあり　　ぎょうしょうしょうにんのやしろなり　　しょうにんしゅうえんのちふて　にうのしゅくしふて　ゆをあびていわく
　　ばんじんしゃ　　にちうふあり　　ぎょうしょうしょうにんのやしろなり　　しょうにんしゅうえんのちふて　にうのしゅくしふて　ゆをあびていわく
若宮　別ふ衣比須社と合せて左右十二王子の社なり　祝答へて曰上人ハ当社の
　　わかみや　　べつふえびすしゃとあわせて　さうじゅうにおうじのやしろなり　　しゅくこたえていわくしょうにんは　とうしゃの
　　わかみや　　べつふえびすしゃとあわせて　さうじゅうにおうじのやしろなり　　しゅくこたえていわくしょうにんは　とうしゃの
死せハ永く當社の守護神たるべしと　拝殿又ハ遥殿とも　神人廳中門の東　御供所　社
　　しせは　ながくとうしゃのしゅごしんたるべしと　はいでんまたは　ようでんとも　じんにんちょうちゅうもんのひがし　ごくしょ　しゃ
　　しせは　ながくとうしゃのしゅごしんたるべしと　はいでんまたは　ようでんとも　じんにんちょうちゅうもんのひがし　ごくしょ　しゃ
中ふ勝ふ下ふ　没後當社と建て若宮と称すと　の坤ふあり西の端ふ竜明神の　祠ふあり神職の竜所なり　舞臺十日能あり　遥廊のおふあり毎年六月十七日　鐘楼　弁臺
　　なかばかつばかしも　　ぼつごとうしゃとたてわかみやとしょうすと　　こんふありにしのはしふりゅうめいしんの　ほこらふありしんしょくのりゅうしょなり　　まいどうたいのおふあり　まいねんろくがつとおかのつきのうのう　　ようろうのにしふ
　　なかばかつばかしも　　ぼつごとうしゃとたてわかみやとしょうすと　　こんふありにしのはしふりゅうめいしんの　ほこらふありしんしょくのりゅうしょなり　　まいどうたいのおふあり　まいねんろくがつとおかのつきのうのう　　ようろうのにしふ
　　あり憲仁年中ふ勝ふ下ふ　　延慶年中　勅願ふりて　　創造す本尊ハ不動愛染合躰の秘佛なり　護摩所　御社の東ふあり不動
　　ありけんにんねんちゅうかつばかしも　　えんきょうねんちゅう　ちょくがんふりて　　そうぞうす　ほんそんは　ふどうあいぜんがったいのひぶつなり　　ごまどころ　ごしゃのひがしふあり　ふどう

明王智覺大師の彫ふ御影堂讓摩所の彫ふ天野口傳ふ日二位禪尼女人の造せふ生
定仏師を中ふ造ると洋一樹造すくらふ多寶塔市影堂の北ふあり 神輿堂多寶塔の
又本地堂とゝ神輿堂の北ふあり四社明神の荒神社山王堂の不動堂荒神社の長
本地佛と安置と 東三條院御願なり
床 不動堂の北西ふあり小庵室一切經藏長床のおふあり池水ゝを廻まり道法親
とゝ西の後ふ行者堂あり 王御灌頂の日行勝上人として止而の法を行
ゝむ即功德あり賞して賜寶藏 經藏の北ふあり此処ふ
経蓋と彫造して玉津嶋明神へ 池中ふ建つ祝詞棚 二八十三ヶ月の式あり神幸
祝詞をあぐるふなり 輪橋本社の正面ふあり橋下の池と御池とゝ又淺池とゝ
表二基 輪橋のおふあり 大庵室 又曼陀羅院と号す 昔八百比丘尼とゝの神淺を納とぞ 花
大師の創造とゝ
謹み〳〵當社の神系を按ぐるふ一宮丹生津比賣大神い伊邪
那岐伊邪那美二柱の御子ふ坐〳〵異國降伏の守護神ふ
と昔神功皇后三韓征伐の大擧ふ當りて神靈針間國造
石坂比賣ふ着〳〵ましまし我靈を祀〳〵べ善驗を現さんと教さ
ましまし〳〵赤土を以〳〵給ひぬる皇后その赤土を以〳〵天の逆桙ふ塗
て神舟の艫舳ふ建〳〵御舟嘗とも軍人の着衣とも染させ

給ひ又い海水を搖濁して渡〳〵給ひ〳〵ぶ海上平穩ふ〳〵
新羅を平伏給へと因〳〵御凱陣の〳〵さ其神靈を本國管り
藤代峯ふ祭め奉〳〵と給ふ 應神天皇の御宇神靈更ふ奄
田村の石口ふ顯ま所〳〵ふ選幸あり〳〵遂ふ當社ふ祭坐し給ふ
三韓の役ふ勲功あり〳〵神靈なるを以て勅して神地の境東
と定め給ふ地大抵今の寺領れ四至是なり又毛荒物毛
和物と猟て神ふ供ぜんが為ふ黒白の犬二部并ふ犬飼二人
と給ふ其犬の口代として田地若干をと寄せ給ひぬる即弘仁年
導〳〵特場明神の祖〳〵又紀國造職讓補のときも白犬一疋を相見〳〵
當社ふ献ずるを古例とす大師廟山の後供御の式ハ改とゝ犬とゝハ去の後なり 約
〳〵さ神ふ坐せでけやく官社ふ列して朝廷の御崇敬も他ふ異
〳〵なり後蒙古の賊皇國を窺〳〵ときも弘安四年四月五日同十二日
當社四所明神の内三れ大神託宣〳〵て日本國中の諸神蒙古
と征せんが為ふ九州ふ発向〳〵ましまし先例ふ任せ〳〵天野大明神一

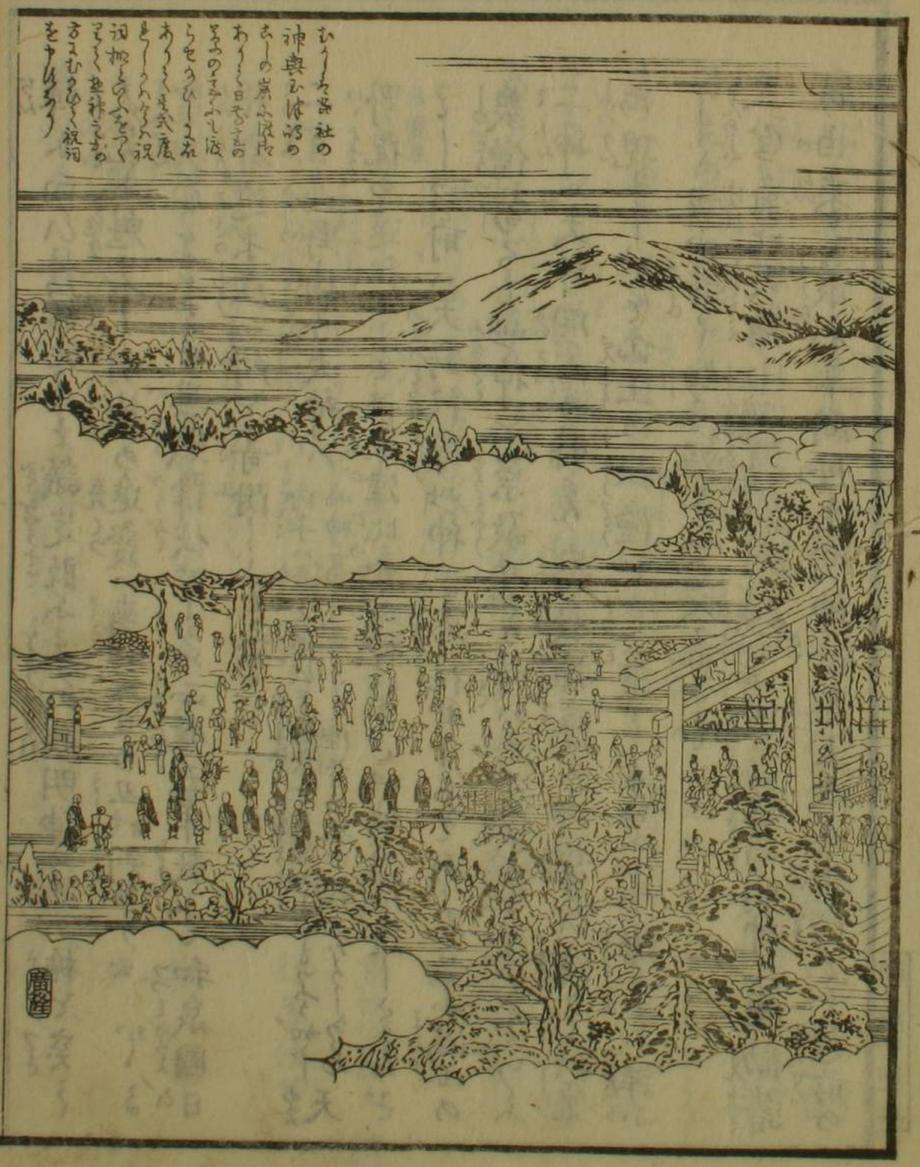



天野社
舞樂の圖


天野社神事能
毎年六月十七日あり

雲堂

天の野社新嘗祭


むかしの宮社の
神典に津の
ものの崇ふ所に
あらくに日そこの
そののてふし成
らせうひしうれ
あらくも武度
とりうれくハ祝
河柳よりふをつく
てくく也神うもの
おえむひく祝河
をやしろう
廣重

陣ふ向ひ給ふべきと議定既ふ手ぬ我明神の為ふ楯を突く
まさ先ふ魁すべき明神の進發ハ來廿八日の丑ぬ刻なり云々かゝる
霊驗あらたふふて異賊降伏せしぬ正應五年敕して和泉國日
根郡近木庄一所と寄附しまつる
二宮高野御子大神ハ御子ハ彦と通ひ天若彦を天若御子ともつゝ如し此神高野彦にして往昔此地の領主なりしゆへ天
野祝の遠祖ふして丹生津比賣大神いまゞ此地ふ鎮座しまゝ
〻〻以前ハ天野祝專此神ふ奉仕せしふそわゝん故ふ満山の
衆僧苟くも此神を崇敬せざる時ハ大ふ祟りとゝくといふ
二神ハ大師開山の時より密教擁護の御誓ひ浅うゝ屢
出現まして山上の弘隆を守護しまつる事緒書ふ詳ふ
〻〻世ふ普く知るところなれど今ハ略
三宮氣比大神正應官符ハ小三宮と號通神四宮嚴島明神二座勸請
の由來ハ異元年間丹生明神行勝上人ふ告給ふ越前の

氣比と安藝の嚴島ハ二神ハ我古の親友なり頼ふハ一所ふ在
て密教と擁護又異國征伐のとき扶翼の神將とせん早く
丹生の祝ふ命じて我殿中ふ勸請をべしとのたまふよう
〻二神と此ふ合祠四社相並べしより丹生四所明神と称す
以上四座の御傳異說諸書ふ給くして一小冊ふ尽す
屋〻〻山上傳ふる所を又異なるゝ他日其辨を詳ふすべし
出觀集
社のくゞめ天の御のゆるふまでいつくふ
月のいつくしき風のくゞしきふ
さりしかとも人のうゝときそすうゝ
きくらふしの風乃いまゞも社の月の影もあめ　行宴法師
十月ぐり南社ふまゐりて
いつくしとふと宮くとしぐ葛乃葉　塊亭

神職

惣神主　丹生一麻呂　家社地の神ふろ大別器として自器ふ非ずして飲食せゞ祓ひ清めたる器と貶すと例とす

日本紀ハ天野祝と合葬のよし川北小竹宮の系下に詳しし　神代より子孫連
綿として希代の舊家なり當家ハ高野明神の末裔ふして紀
國造豊耳命をもて中興の祖とす豊耳命ハ高御魂命五
世孫天道稱命の末裔なるとバ國造家と親姻篤〳〵なり
山上山下の法字遷宮の時すべて當家より執行す家ふ古文の
祝詞古系譜ふと藏む其文の古雅天下ふ類なきの多〳〵
ど又古文書數百通と藏を

二祝一人　三祝一人　四祝一人　卿供僧六人　各妻帝行幸の大嘗祭に出る
社家十五家　宮仕六人　神楽男五人　又巫子
巫女八人　又八乙女

山上宇庫藏文書

太閤四月廿一日天野社孝烏帽子一双之外不見
社頭其上同日三谷酒殿ハ神馬幸時　御戸自然開同

曉自彼社有神馬鈴音指西而今之太之由神主常家
ふ注申ハ此事不日雖可馳申就之先為彼祈禱聊送
日數之間太弘安四年夏頃殊抽願祈ハ応感應揭焉
間依為佳例宮方御影堂入寺方金堂衆分御社於三
ケ所點七ケ日勵老少者一同之願誠被晝夜不斷〳〵精
祈ハ仍進御巻數如此直ニ有御授寄ら由依冥感
言上件祐信恐惶謹言

七月十六日　　檢校法橋祐信狀

進上　秋田城介殿

右文書裏書

法〳〵異〳〵抑當御ハ神馬鈴音ハ太之廿日曉晨法
よりとそれとなくふ夢中ふ此ハ音ハ夢ハ猶ときこえ
ハ弓ハ仏耳とそれとなく家中ふハ者ともふ夢を

関之と四人之皆明神酒殿より
つゝ出させ給ふ〳〵き津島へ渡り給ふ時の神馬の鈴の
音聞ゆ〳〵ふる西をさ〳〵さうの之間渡り給ふ時
ゆ〳〵しくよりあり〳〵當時やうこの者らまて思ひ〳〵を出さ〳〵
ふ〳〵さ鈴の音も聴こえ給ひ給ふ此由も神主〳〵参り
ふ〳〵ぞ申ふと〳〵不申上ふ仁須ゝ是ゝ出入ふ恐〳〵謹〳〵

閏四月廿六日　沙彌之佛

進上　院主代入寺法房

同文書裏書

今月廿一日天野社鳥如先年皆悉飛太公ふ天只一双
御留ふ同日又酒殿御戸開ふ彼御戸者常家堅奉
納ふ天御鑰不預他人ふ前〳〵未如此事不ふ之由歎
怪〳〵ふ如兄井藤四郎の道〳〵佛申ふ同暁ゆ大明神法

行之時有神馬鈴音指西太公道佛并家中廿余人
輩皆聞之ふ上者以之案ふ御殿御戸明神令参
給ふ之条無異儀ふ哉嚴重不思議事ふ間注申ふ
此旨可有法披露ふ恐〳〵謹〳〵言

閏四月廿三日　散位常家上

進上院主代入寺御房

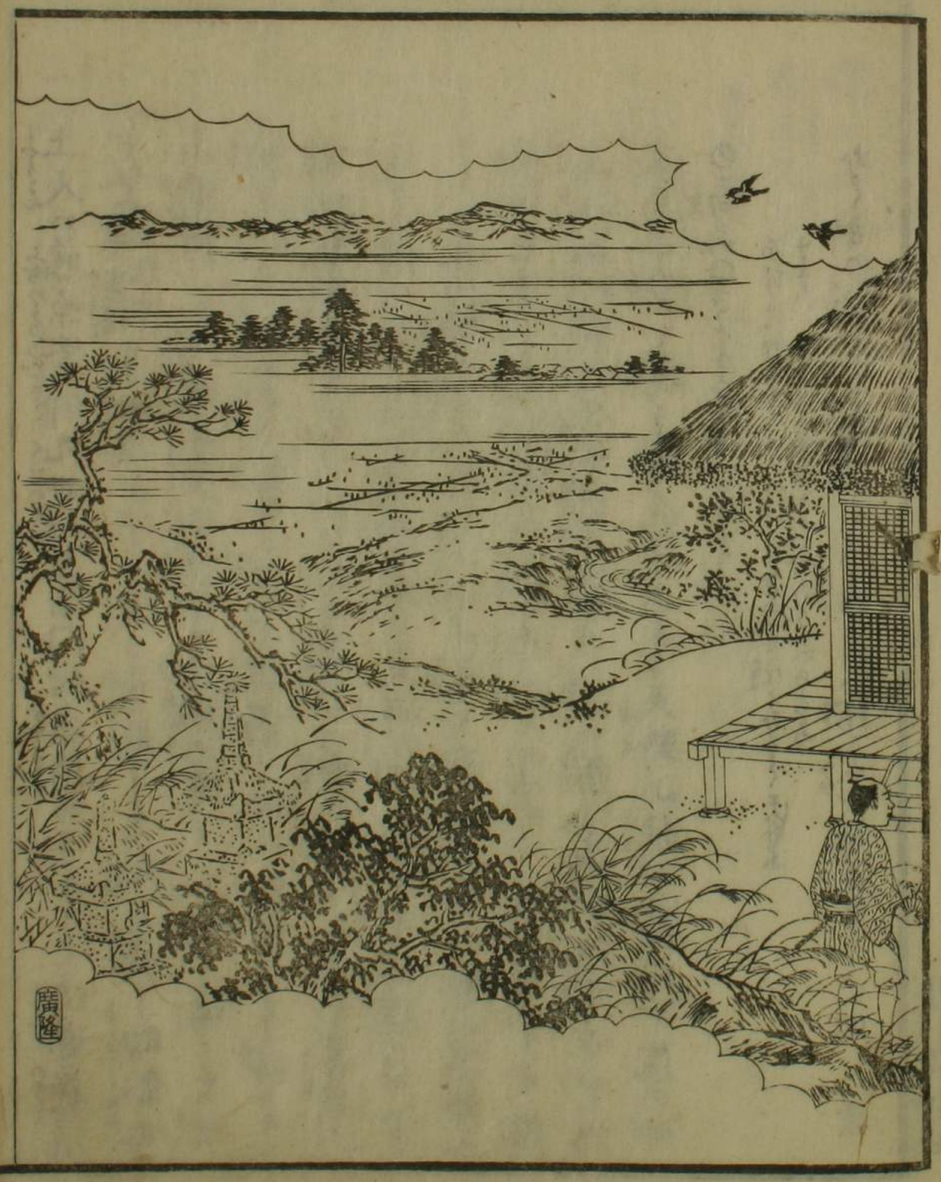
異國降伏御祈事奉詣丹生社可令致祈精勤候
仰執達如件

永仁二年四月廿日　陸奥守
相模守

中納言法印御房

○傍の宿　林社（葛城先達の行所なり）高野先達巡礼のゝる今日客を
○西行堂　本社の西南四丁ふわり今たゝ殘せり
西行上人墓　堂の前ふ西行ゝ我田とりし田あり
堂の前ふわり上人ふ建久元年年七十三にて河内ふ発
後人此墓跡にと五輪と営こそ菩提を訪てゝ

神生能弗不動尊の靈力を因て紫雲の賊兵摩滅の図



西行堂

上人ハ藤原秀郷九世孫左衛門尉康清の子ふして佐藤義清
と云ふ或ハ憲清ふ作る累世武を以て著る勇敢にして射を善し頗略
ふ通じ　鳥羽上皇ふ仕へ北面の士にして和歌を嗜て玄
妙ふ通る　上皇も才を愛して親遇し給ふ然れども素より
栄利を喜ぶず常ふ世を避る志あり遂ふ妻子を棄て嵯峨ふ
往き僧となり名を圓位と号ひ又西行と改むと云ふ歳二十三と
なり後紀伊山上及び此地ふ庵を結ひ密教を修し故ふ高野の
風詠を多く妻室并ふ娘も亦尼となりて此地ふ居る撰
集抄西行物語発心集等ふ見る山家集ふ待賢門院の中納
言局小倉を捨て高野ふ住し頃院の帥
の局ふ逢きこと幸ふ
ありけるときの妻尼なりけり天王ふ
まれ給へて今ふ尾あり社のもと
なく出の家ふやつまていく社うわまのふ沈る家のぞうぞ　似雲

紀三編四ノ四十八

○圓三郎碑　本社の西ふあり建久四年鬼王九
と云ふ碑ふ作る
○有王丸墓　本社の西一丁
許ふあり

源平盛衰記

俊寛僧都の女父死と歎く条ふ

姫君涙ふ咽く物も仰せもあえず出家の志有と仰せ給へば有
王丸兎角して高野の麓天野の別所と云ふ山寺へ具し
奉りて其ふて出家し給ひふ給ひふ給ひ真言の行者となりて
父母の菩提を弔ひ給ひ高野ふ登りて奥院ふ主の骨を納め卒都婆を立
て即出家入道して後世を弔ひ給ひ

○子日權現社　本社の西ふあり縁起
○亀田大隅守碑　下天野村ふあり亀田氏ハ浅野侯の
名臣なり碑法あり
○小都知峯　冊生結門より天野の里まで八丁許りて
紀ノ国ふて大峯の里ふ出る
○二川鳥居　天野より里八丁許りて
町ふ出る あり

冊生高野両大明神の華表なり高さ一丈七尺廣さ二間
山上壇場両大明神の一乃鳥居なり額字ハ羽足の傷宿
日法印の筆なり〳〵筆力凡なり〳〵

○古佐布村 二つ家居の下北谷なり冊生明神悪幸のところ
忌樹さしくまつる北谷なり付村と高野紙と業す

○梵字岩 二つ家居より
ゆ丁〳〵あり

○應其池 梵字岩より一丁程田村の間ふあり
梵字上人の造るところなり

○地蔵堂 程田村

○笠木坂 傷所の左方山中ふ笠木村あり
旦の坂かしがべし

御幸せ〳〵むとせ〳〵る笠木坂さそそ〳〵る人うけもあ〳〵 白菅荒海

扶桑畧記
寛治二年二月廿四日申刻御笠木坂立二十間一面屋一
宇檜皮葺南面懸翠簾為御所引参議右大辨藤原朝臣
参詣 白河上皇高野御
記

○日光月光窟 虫偏今翳れ

○矢立茶屋 四軒茶屋又ハ
辻の茶屋とも
此所町ふ道と若山道との追分にて茶店軒をらべむし
獵場明神の射させまへる矢の立りとも杉あり矢立杉

津藩記行
扶支と字のしどと社の名れ矢立乃茶屋とも木の字

○鏡字池 道ふ
側細川村へ
今ハむし〳〵阿波の大滝寺の栄儀とも僧あり〳〵夢中り
高野へ登詣〳〵矢立の茶屋ふ端居〳〵此池とも名べ
水上ふ鏡字〳〵ひ〳〵光明を放ち〳〵側ふ一人の僧あり〳〵
四ふ此〳〵と向〳〵まべちまとなん鏡字ハ池とも名へきその
後この名ふ素を池水とかけ〳〵せ〳〵ん〳〵ふ水底ふ楠り
鏡字を鐫つ〳〵乾の角ふ置〳〵を筆勢凡俗の乃ぶ所な
わ〳〵ず是必大師の御筆なり〳〵むとひ〳〵ぐ夫より絡〳〵傳へ

〻鏡字う池よりいなり出水を飲るゝ心神爽然として
智恵百倍をとゝ〻

○地蔵堂 茶屋の側ふあり木尊ハ大師こゝ〻土砂を運ゝて作りをゝまし〻ぞ
赤坂 地蔵堂の上を〻山上と高野とをけ変して道助ナビと六ツ谷〻ハ六比丘ともゝ
大門とのゝを五十丁道とゝ〻

○袈裟掛石 坂のまん中

○捻石 仁和寺法親王寛
ゝゝえをを巡るべきゝゝゝゝゝ岩の衣きをゝり
ふあり

○涙川 街道の左
方溪ゝあり

○押上石 坂の右
ゝあり

行ぐ先乃 行ぐゝも とゞゝゝ年 和しゝごを 萍 左

むゝ〻大師 當山を開ゝゝゝゝ堂塔建立あゝゝゝゝ世間
ゝ普くきゝゝえゝゝゝゝゝ母公隨喜ふ堪へどゝゝゝゝゝゝ霊場を
踏むゝゝをけるゝ山下ふ茅ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ大師出迎へゝを

うましい我みつる女人のいろうるべき地ふあるべどうひとぐまうへ
ゆくさめぐふ連ゆくましいしかども母公さうふ安ゆをふもず大
師のくまへやう強く登りむとどろ石さべ是を超さぜうまへと御
袈裟を石ふ懸うへひ石をべ今袈裟石と称すさて母公
石を越むしうしとうとう忽五障の雲ありひうう霹靂
山谷ふ震動し火の雨ち中ふ大龍現うき出く一歩も進
むと能べ母公大ふ驚さ宿世の罪業を歎さ憤て傍の
石と捻たまへ今是と捻ひとへ大師ハそ時祕文を誦し
右の手うて去の大盤石を押あげ母公を覆ひうまひしとゆ
その御手形今ハ巖面ふ顕然うかく布有のいとふ逢
うまひくえも登るまでとそうへうむとしうつて火の雨も降
らずなうう母公その日踊泣しうまへあるべ俗となうしを
号く涙川とひ火の雨ろ降うしふを焼尾とうひく千載の今

もゝとゝ〻を絲とゝのゝそひとゝくゝふ佛の方便なゝべゝ

○七色木　日上谷中ふあゝりゝ今ハ名のゝこゝるゝ　雑書云　色やうぞ　楓　松　杉　柏　この七ゝを一樹ゝぞゝる

○鏡石　左ふあり

ゝの石光明温潤ふゝゝゝ万像を照映をゝて究明鏡ふ對ふゞ如ゝ當山密教相應の霊境ゝる一燈とゝゝべゝ

不空三蔵菩提法云　山の高頂ふ登ゝて大石のゝ清ゝたゝる磨ゝるゞ如く人影の現ゞるを見ゝる事ゝゝむ此石ハゝと聖人吉祥の石なゝり白茅を以ゝく席とゝゝ石の乾角ふ坐ゝ真言を誦ゝる時ハ必ゝ法の悉地を得べゝ持戒の僧ふゝゝゝハ座ゝるゝを得ゞゝ

大門ゝゝくのゝりゝくふゝゝのゝを儀のゝゝゝを指ゞゝを云ふ　後ゝんゝゝゝ

大門口関屋合戰

春日さん
いとゝのゆうの
いのせもあり
くゝたとおち
おそむ
そのゝゝの
とも

首宮

わつ山口より七千余そ森口長御かーのぐりくふらふ坂中ふ
雑所あり一方はかりくくる大磐石巻重ともなく峙ち一方は數
百丈のがけなり一騎くちの所なるふ山法師宮かのうげふかく
きをりくー一物の槍をりつくらうる武者と馬上より法き落く
くねくー馬人といぶぶつもぐーよきりくりつかる多勢くる
先陣のかくくなるはちぶくくるくる千なり又は日勢ふ
りみ出くれ谷へおつくくるの數を志ぶくるを法師はくうぶ十
人よちんざりくまでも數千人をふたご留ふくるこまを地
の利ふよりなるべー

○護摩壇 右ふあり

毎年菖城先達去の所そ柴燈護摩を修すを例とし此
所より南して右ふ入くー大門の山面ふ出くと古道とす迂迴な

紀三編品五十四

くて通行する者なく大ふ廢すれども町石なか存せり
あまとより今の街道と長坂とす

○見越坂 此坂より遥ふ西海を見越坂より流ふ山名あり

わざの系あとをんわすす法師よりあがめつくー貴とぶあり 濱名浦雄
序ふ正智院の道範阿闍梨南海流浪記ふ二月四日渉路島のあり近く
なりくれが東のくき千里の如くまてらやる中ふ千ふくるそのくんゆくるあり山つまの
まーあをりひやりあくくよくる法師のくくくくあをくくいあをくくるそのくんゆくあはあば
まりきくくくくくるそのの山は中ふつるいくるそのくんゆくくくくく

當山結界の内外松樹林をなして千歳の翠を爭へとゝのをる
者皆唯松あるのみひとり此木の雄姿なる事奇とつべし〻〻
西行上人登嶺のとき此木を怪しゝ風詠をなすいれば
空中のあるをみて絲のごとくなる故ゆゑ矢松といふ

○下乘牌 七口ともに建つ

○女人堂 大門の側にあり詳ならず 沙石集 女人堂の条下に出す

一條院の御時摂政御堂関白道長の御女二歳ばかり
せさせ給ひ后にと五ゝと思食かゝづき給ひ程少し
悩給ひ息絶給ひぬ御母うかゝ〻思ひまどひ給
まゝ御いとをして助給へとおもひめぐらし給つゝ高野の大御室に
をれり〻おはすれば綿の袋ゆゑ姫君と〻〻我御頸よりけ
〻ゝ高野に登りて半の程まゝ〻いまと給ひ給ひ幼
〻〻ハ御せどもに女人堂の門の内へ入給ふ〻〻

五古ざうと持〻門の外ふく加持〻〻まひ〻〻まび穢生〻〻
遂ゆ后ゆ〻〻せ〻〻まひ〻〻上東門院の女院となり

禁制記 正和二年八月八日 後宇多院御幸ま〻〻〻るゆ近里の
女どと拜こたそまつゝだやとそ男の姿ゆよそひて結界の
中ゆ入んとせ〻〻ゆ俄ゆ雷ゆ〻〻き暴雨沛然として
空すゝまゝ〻〻降〻まび堂衆等數十人杖をとり〻〻大門
の横峯ゝ向ひ拂ひ〻〻めゝゆ陰雲忽消〻〻日
光朗〻〻と晴〻〻ぬ去のゝ上聞〻達〻法皇弥
霊地の効験を感じ給ひ〻〻と〻〻

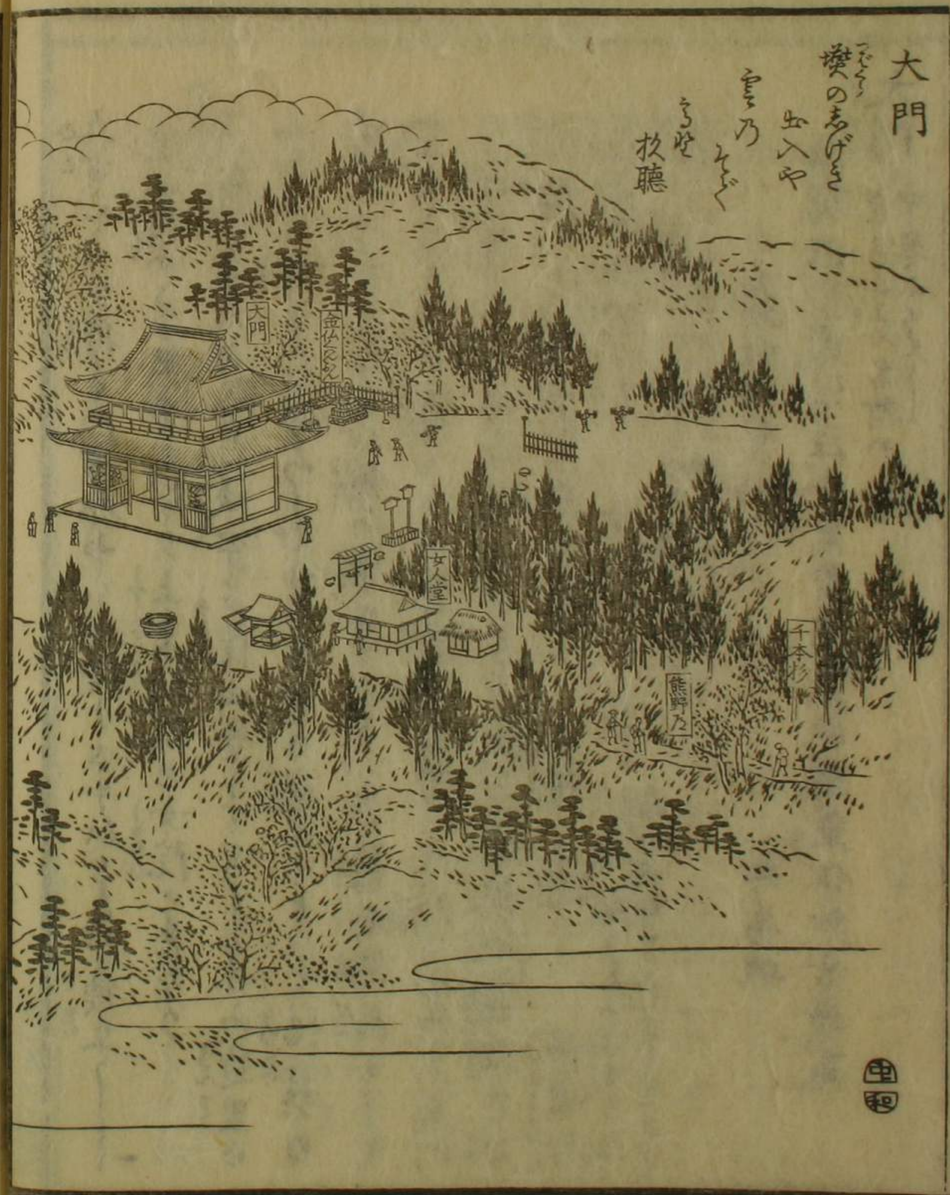
題女人堂 有自注 今省ス 神易興

法関何堅固涕泣女兒曹不見祇園遂但知金嶺高

○大門 中巻ゆ山上の名所ハ

大門

樊の まげき
出入や
宮乃
うぐ
牧聽



大門より天狗まで
はぐきの圖

泥田坊
芦角
陽光や名の
あらはる
仏供岩
細川危
猿飛危

長福院山
千山
ゴマダエ
猿飛
冠子川

大門ゑのき
能石
見義
七色木
住流
甫石
廣場
七色の寺木をみて
千水

細川
橋石
用川
押上石

大門ゑんぎき
花坂ゑん
矢立ゑん
大門まで
五十八丁
空はるゝ
かすみのそこ
うけのぞく
しづくつゝ
明る

矢立茶や
矢立杉
毀手池
矢立ゑん
大門まで
五十八丁
矢立杉のあらそ
きて
こちふりも
矢とりもとゝゆく
さきをよそ
杉の木かげに
おもひこそ
千川
麻生津
巻山口

見晴窟
信雄

大門ろづき
五月雨や
丁子のろる
詠年
陰お
天上坂

卜枝

天野峠
八町坂

大つゝみ
天野
西門院
淡田

長床

天の野の社

下山到慈尊院途中

回首嶺頭雲已封
俯頭山脚暮煙重
危坡未盡斜陽盡
直下暝然報寺鐘

海嶠

不動坂口

○清水川 橋本及東家渡口の辺をいふ
稱名院右府記
清水とらへ川はよりの川ちをゑなれべいつ〳〵うるれのもうげも
ぬびくこうろとさめて わうり日くれぬまで 絵堂ふとまり侯

夜の念仏など 徳聞〳〵あり〳〵〳〵

○二軒茶屋 紀川の南屋あり 橋本及東家の渡口ふ 對を柔店二軒あり学文路と一里
○三軒茶屋 二軒茶屋と接す 柔店 戸あり
○地蔵堂 六地蔵とて六躰あり 堂内に安置 堂の一方に山上まで
西行上人像 長七寸 作 西行比丘さみ〳〵とす 西行松 堂の側ふあり

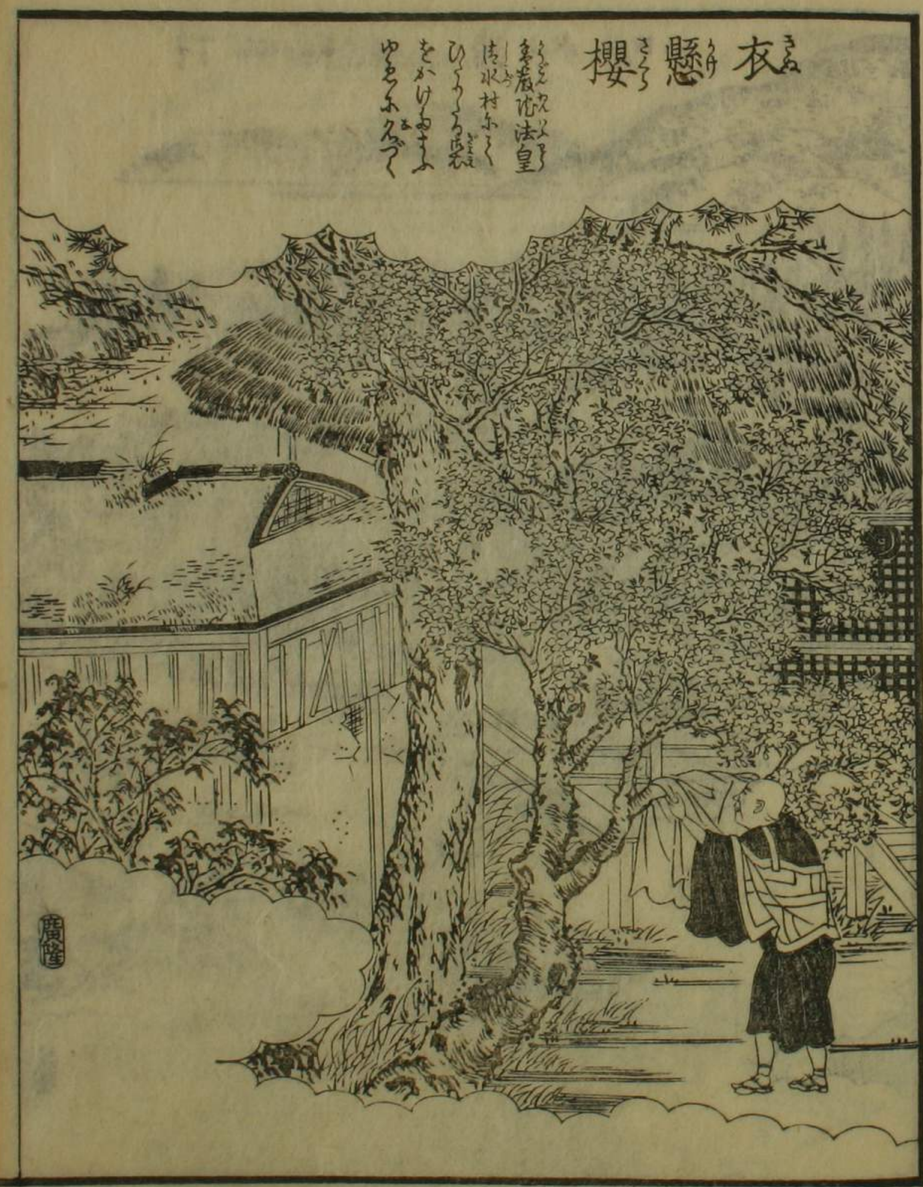
あるりの草履をうゝと歩のあの 芭蕉

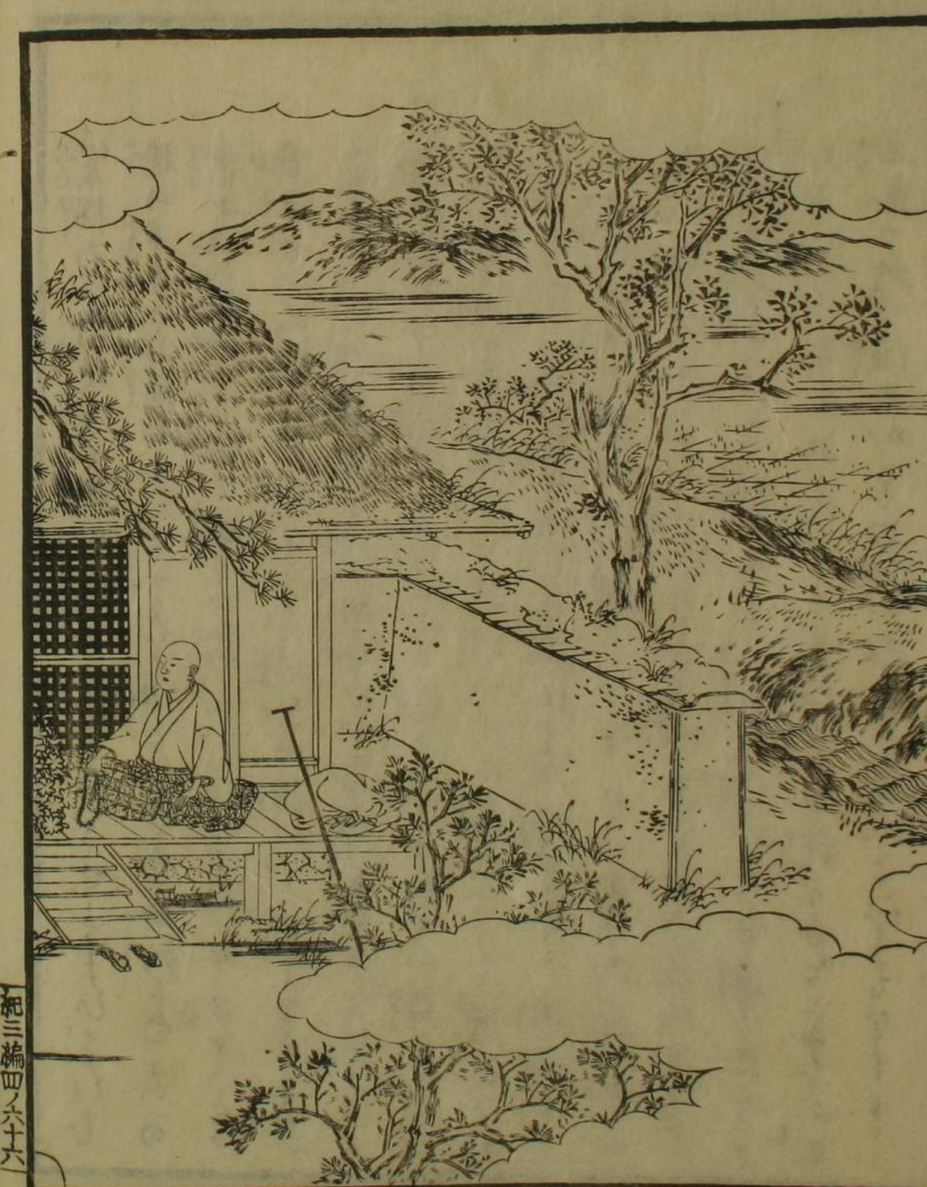
衣懸櫻 堂のおふあり 光厳院法皇の御衣をかけさせ給ふる櫻の古木の花ゝるあるとかの小樹と樹〳〵

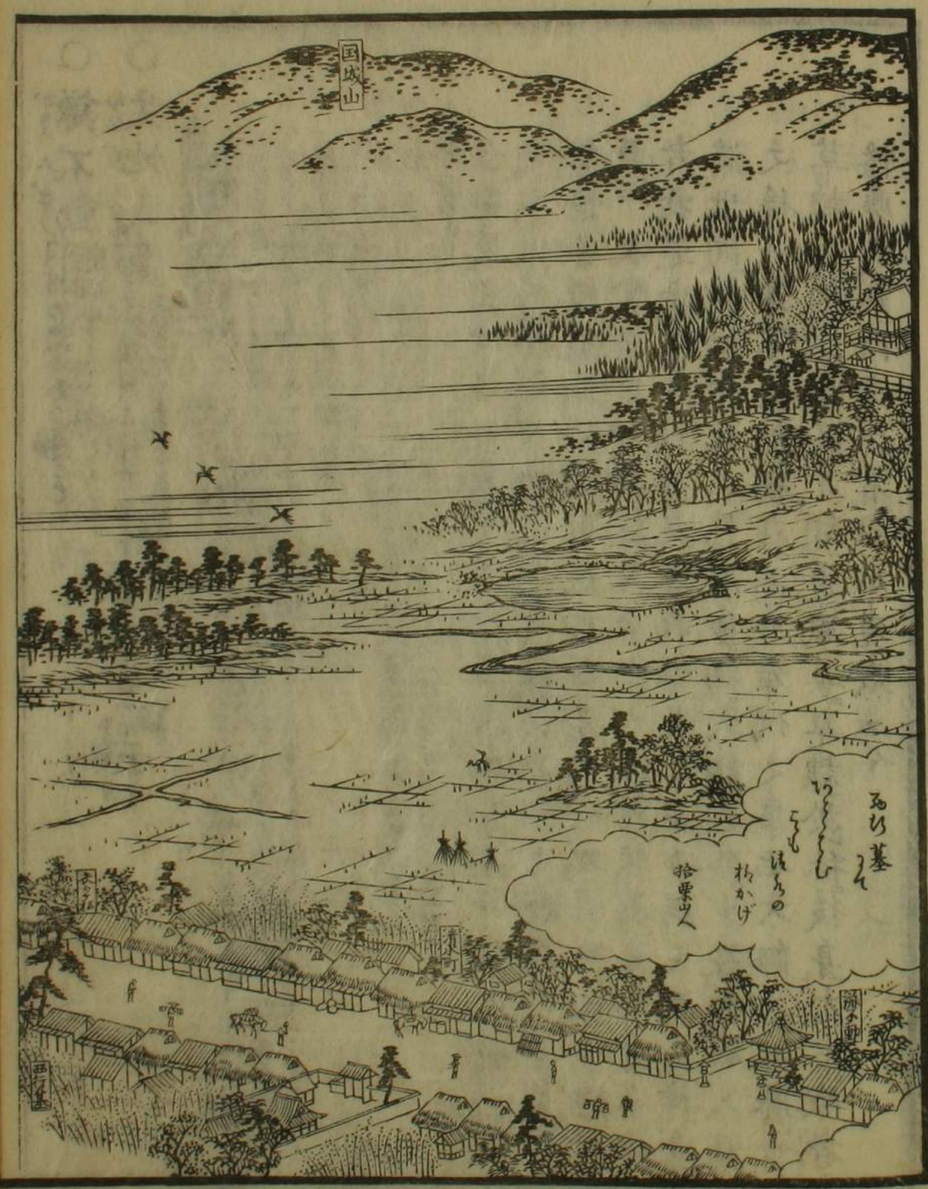
とうけ〳〵 衣の袂下かゝみて今も涙のちる櫻うゑ 橋可折

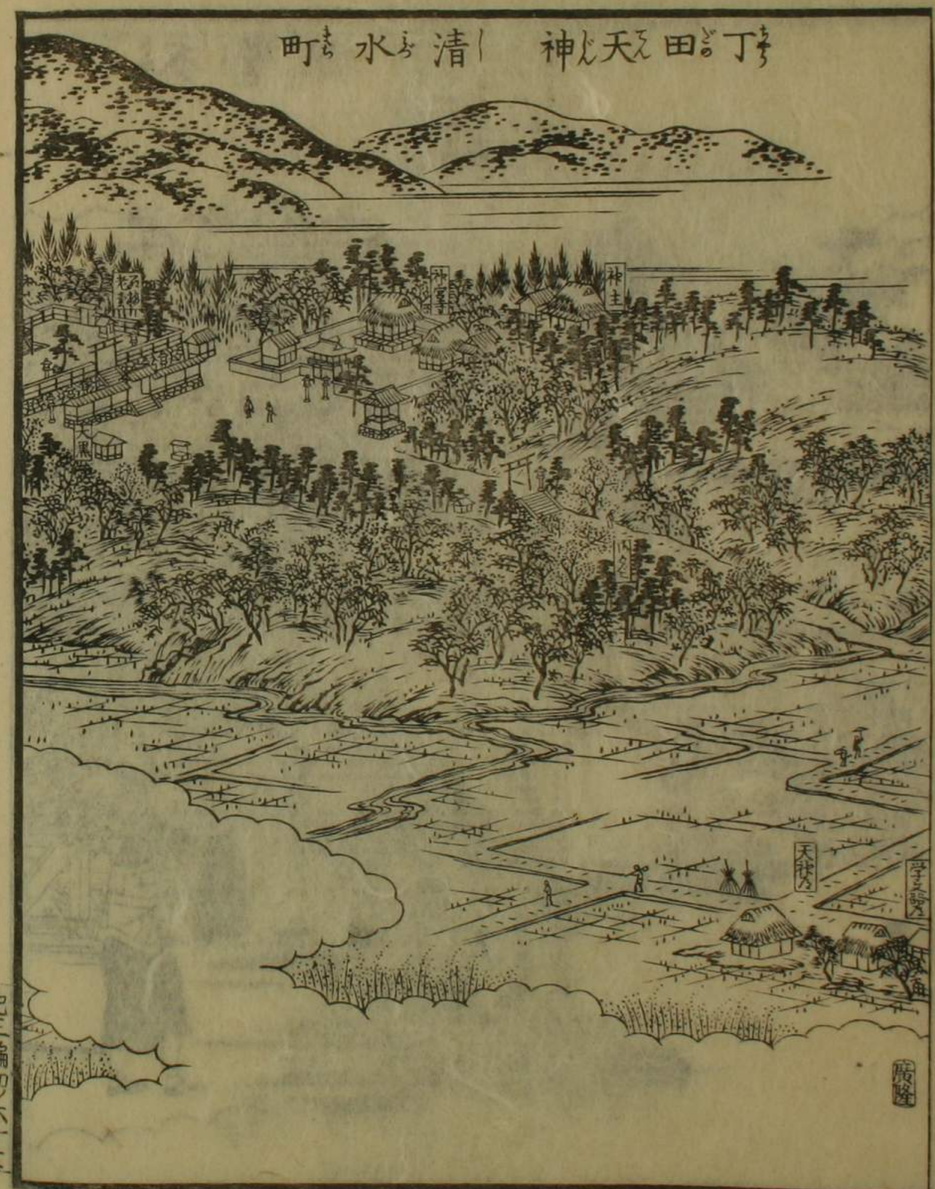
太平記光厳法皇御臨幸の條
日を経て紀伊川を渡らせ給ひしるときさ 橋花わ〳〵ろも危き

肝消〳〵 御足冷〳〵 御肝消〳〵 涙うゝ絵させ給ひ給ひ
橋の半ふ ふら迷ひ〳〵 ちそすると 進ふ ちゞ如行ふ 去の
色ふ 碑を 弾て 眼する 去 そぞ うゝ むや 笑〳〵
武士七八人 絵より 苔 〳〳〳〳 法皇の 橋 ふ せ ひ
〳〳〳〳 此なる 絵の 絵病 気なる 衣 もなさよ 見 かど
色 そのひ〳〵 橋 わ〳〳 〳〳 〳〳 〳〳 〳〳 〳〳 〳〳
かゝて 押 〳〳 〳〳 〳〳 法皇 橋 押 〳〳
〳〳 〳〳 〳〳 〳〳 〳〳 〳〳 〳〳 〳〳 〳〳 〳〳
〳〳 衣 〳〳 〳〳 〳〳 〳〳 〳〳 〳〳 〳〳 〳〳
かどふ 面 〳〳 血ふ 〳〳 〳〳 〳〳 〳〳 〳〳 〳〳
傍なる 辻堂 〳〳 〳〳 〳〳 〳〳 〳〳 〳〳 〳〳 〳〳
古 〳〳 〳〳 〳〳 〳〳 〳〳 〳〳 〳〳 〳〳 〳〳 〳〳
石 出 〳〳 〳〳 〳〳 〳〳 〳〳 〳〳 〳〳 〳〳 〳〳 〳〳


衣懸櫻
参議従法皇
清水村ふく
ひらひらとちる花
をかけぬきよ
ゆもとふくべく
廣隆




国城山
天満宮
ゆかしき
ふるの
わかげ
拾要少人
湖水
西ノ宮


丁田天神　清水町
神主
神宮寺
天満宮
天満宮
廣隆

○鎌不動 日村の内にあり 縁起造作せしそうの像なり

○生地氏商 右家国とゝむ文殊なりと云々

新撰長禄寛正記

右衛門佐義統 [illegible]

○丁田天神社 日村より[illegible]の左ふかの[illegible]

政事要覧云

余就寛弘四年出為河内守五年九月五日往大縣郡普光寺僧幡慶語云嫌之門夢詣彼高野之處有二宿徳僧謂倚子曰吾弘法大師是也汝遅来此地若思衣食難歟至于衣食吾自可供持天台六十巻可来為見也菅丞相者我遠世之身野道風者我順世之身今稱天満大神遍満世間結縁衆生也幡慶夢謁大師已非少縁大師入滅之後其身不亂壊猶在高野希代之事也大師才智勝世草隷得功丞相足才智道風善草隷於称後身尤有感者幡慶頗勤修学仍有此示現歟云々

○学文路 此村縁舎多一玉屋与次兵衛と云所房敏昌の苅萱道心の因縁あり家数百軒程と云河根村を一里坂路嶮々

○物狂石 学文路村内九郎よりあり上ふ小堂を

○慈尊院道 日村の内にて東西ふ通ずる大なる道を後と

○梅天神 日村後傍

○苅萱堂 日村[illegible]

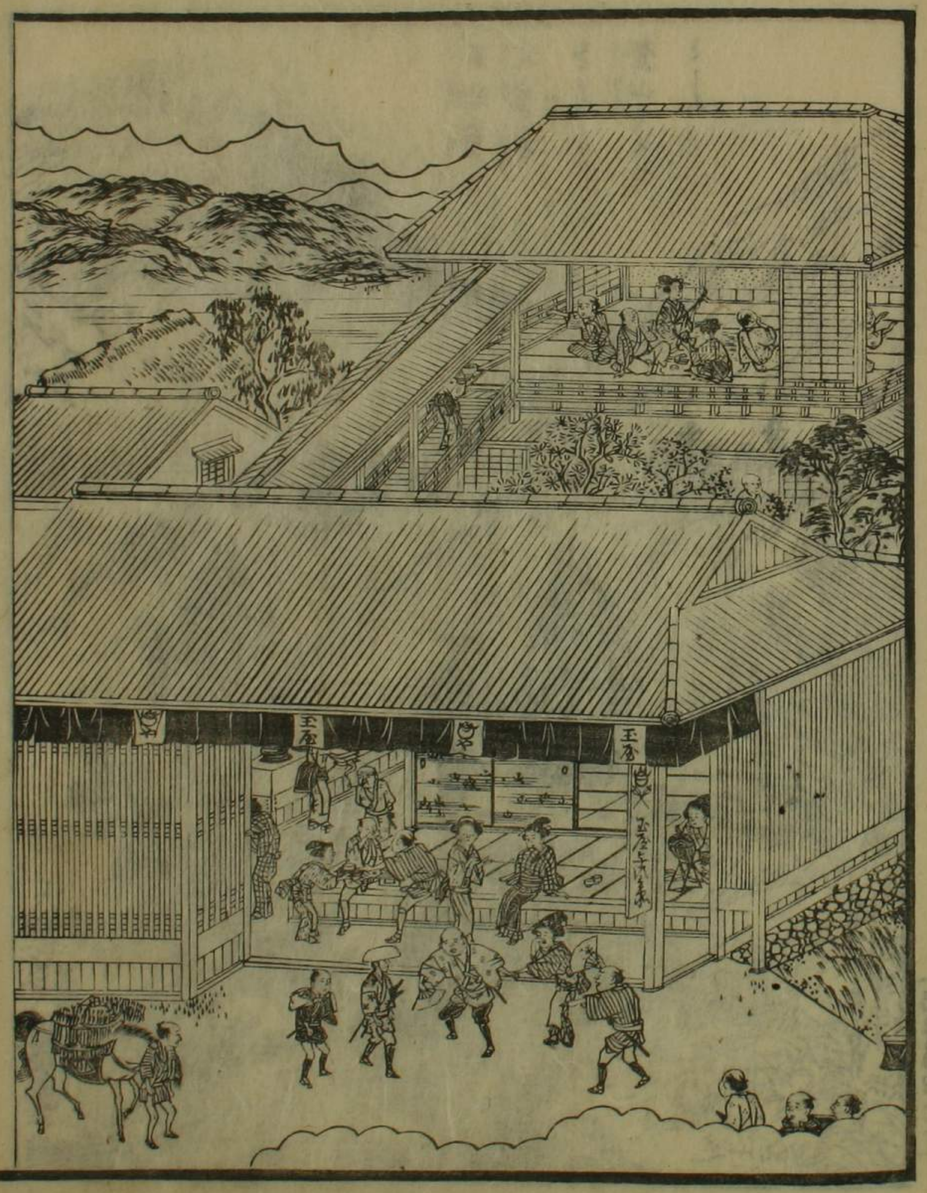
縁起曰云 夫老人の普く志る所の苅萱道心と云へるは 崇徳天皇の御宇築紫博多の守護職加藤兵衛尉繁昌のゝ子父繁昌八幡大菩薩の霊夢ふよりて石堂川の邊ふて比叡菩薩の化手ふ持給ふ宝珠のゝ如温潤ふして旦光あるを母の懐ふ孕ふ[illegible]

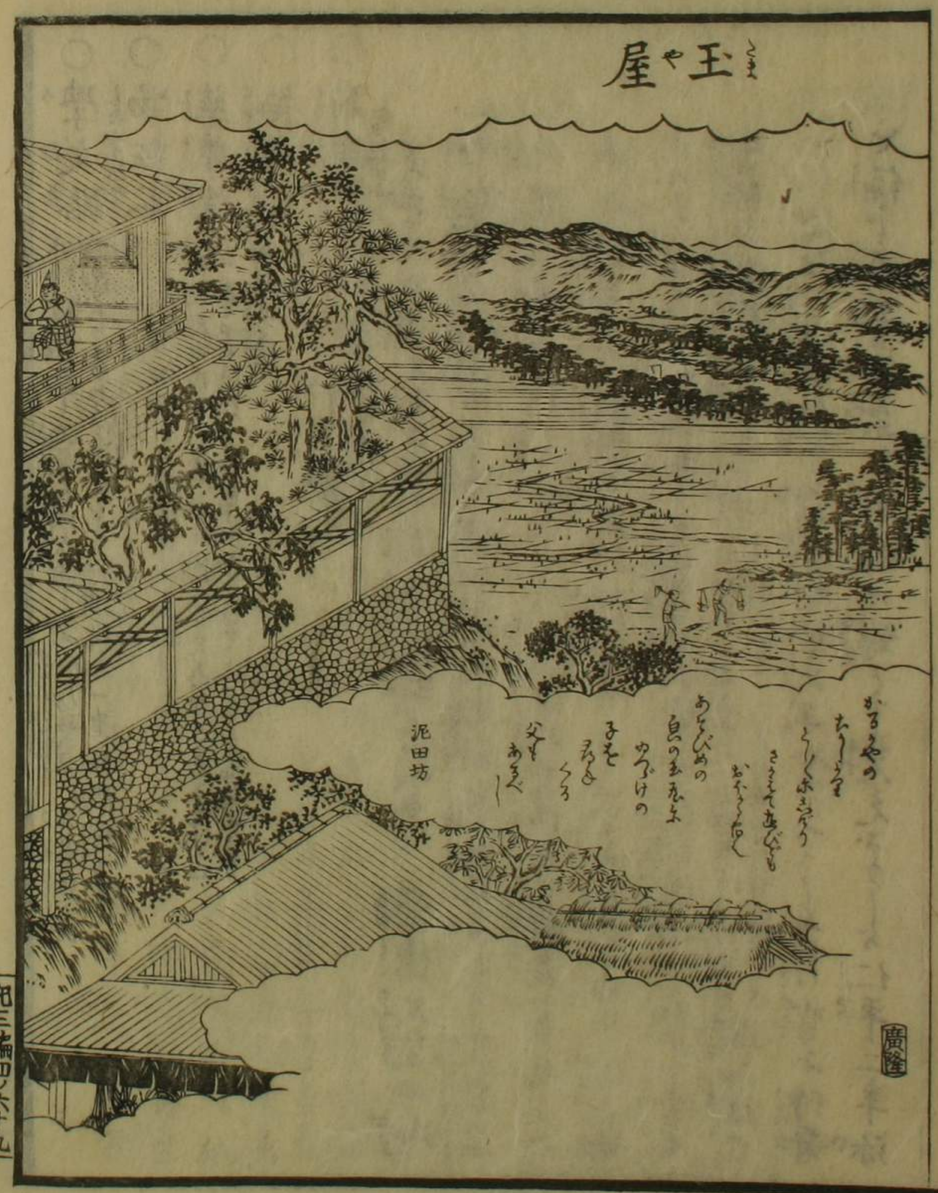
[illegible]以来懐妊して長承元年の比誕生せし人ふ[illegible]

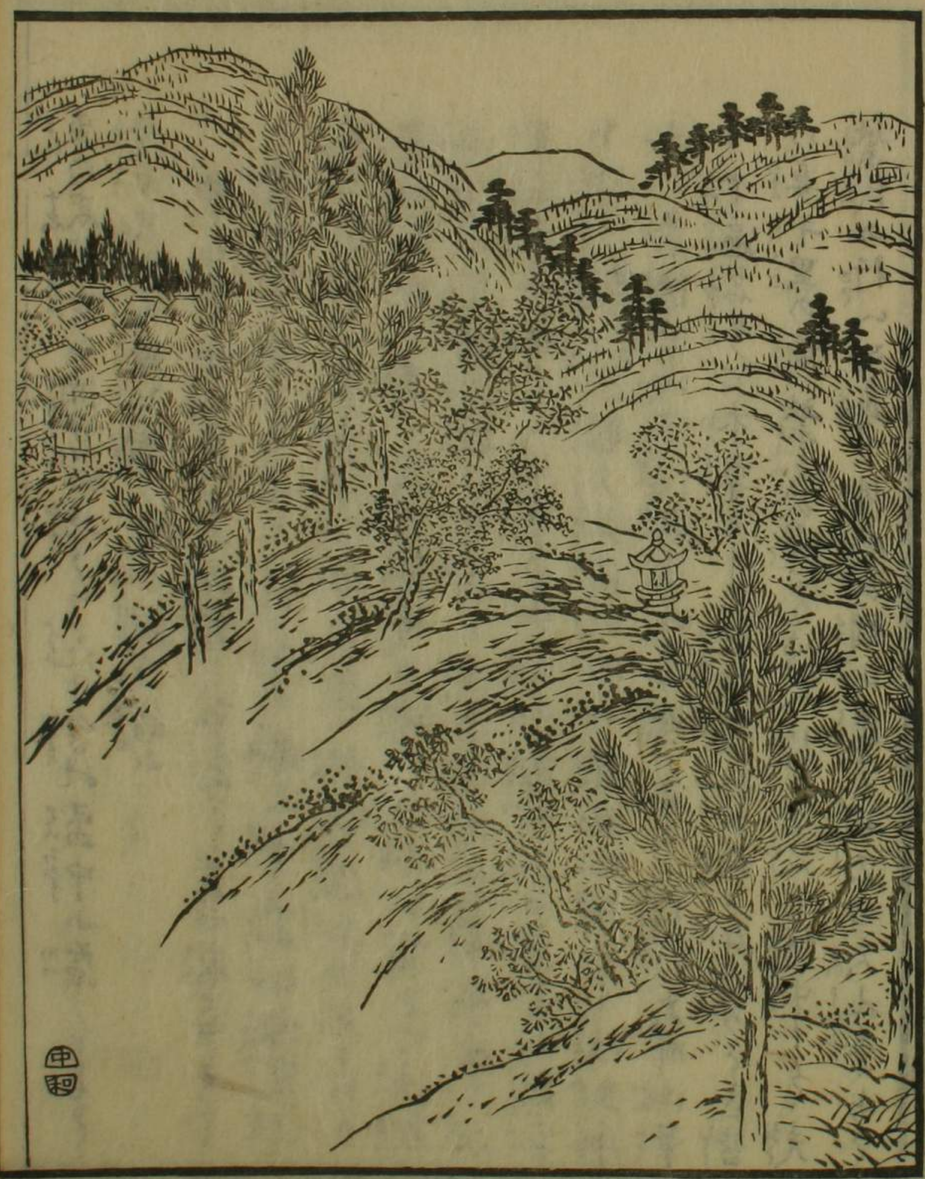
加藤左衛門尉繁氏と号し初名を石堂丸と名付く苅萱の職ふ在て

八仁徳を一國ふ施し慈悲を四民ふかうふしめ月雪ふ侍奇

と称ゞ飛花落葉を出離の媒とも[illegible]仁平二年弥


玉屋
玉屋
玉屋


玉屋
泥田坊
唐峰



石動磨
父重氏
を尋ね
登山する
ところ

生の末園生ふ須宴の折ら花の含み盃中ふ落るとゝ
老少不定の理と明〳〵めを剃の扇ふ
ゆらな〳〵深山の花くふ俗果〳〵ゆきもくこゝろやゆとゝきます
と書置〳〵夜ふまぎれを城と出く都より黒谷叡空上
人のみりくふいろう上人の化導ふよりて剃髪深衣の身となり
等阿法師と名く生國箱崎の神社御告を蒙りて法然
上人より念佛三昧の奥義を授りて書夜称名怠らず永
万元年の春上人のみもとを出く高野山ふ登らく隠家
を営く草堂ふ朝夕弘法大師の禪庵ふ詣で往生浄
土の素懐を行ひ法然上人より賜る弘法大師御筆
の十遍名号を本尊として念佛修行の功さけぬるゝ昔
の妻千里の前繁氏の母より傳へ持ちるを懐中しく夫
繁氏の行へを尋て播磨の國ふ来て明石の大山寺ふく

出産あらく男子ふ父の幼名を与へて石堂丸と名け十四
歳のとゝ母端もふ父繁氏の四くへを尋ひて此里ふきく
昔桑紫ふく玉田典為次といふる浪人の今ハ此里ふて玉屋
典次とのへる者の宿ふて病の床ふ臥し給ふ永万元年閏三
月廿四日の朝ハ露と消えらるゝを健恭妙尊大姉と戒名
を授て葬るとかゝ其墳墓ハ今播境内ふ石堂丸ハ
其翌年の姉ハ比ふいるゝまで夜る母の墓所ふ供給し
昼ハ父の行方を尋て高野ふ登らく仁安元年の秋
高野山ふく父等阿法師ふ尋ひ逢ひ〳〵等阿法師
い我父なりといく伝ひ父繁氏入道ふ成ひ高野山離
の要と従く曰ひ〳〵輪廻のきゝふをきく〳〵父上いそ
ろ二度そのゝゝづめを結ひ給へんやゝきゝ尋ひ逢ひ
ゝと定く名をも名のらまゝ父母の恩愛を慕ひ偵

遇孝養の志を運むとあらぶ念佛修行してもみじく
浄土ふ往生〜蓮坐を双つく未来永劫の値遇と誓ひさ
まく是こそ真實の孝ふなるめと従永さく理ふ伏し郎
等阿法師の弟子ともう信生法師と号して両師渚とも
ふ念佛修行急てわく昼る此里ふ下りて母の墓ふ詣ぐ
夜い高野ふ在〜観念の月をもまめ師尊ふ一刀三
禮ふ地蔵菩薩の尊像を彫刻せらる今當寺の親子地
蔵菩薩なり　下略　其道心異傳あり法燈国師上年譜及宝簡集編きぐ

○風ふちらかるや堂のけしけ花今ろんと嘆もろん　玉川舎

○大師硯水　重坊村後藤ふあり大師作文の
　　ぎ井水を引ひ〜まつりとそ
○河根村　此村谷間にて某所の魚れ
　　絡金ろ〜ろう和谷と一里

親長記　文明十一年三月二十二日立高野宿坊於兼と云戸　歌ス

わともすくいそけびたりふきの国やかひてい玉をさ墨ときけども

○産土神西社　此村の入口ふあり床社あり　大智山日輪寺　別當什物　翁之面　康治

二年五月十九日竜神献之云〜人ふ月日ふ日
面ふあり西といのくふかくず〜あり

○産物傘紙　此村にて紙すきふる地紙と帖と
　りて六十枚を一帖とす

鹽竈古跡　此村彼方の方後ふあり山ふ儀て一所の
　ふんあり岩四のふよう堀窪ふとく

○河根川　河の根村の堺と伝る

○千石橋　河の根川ふ架す長十八間幅三間探千あり寛永年中造只明石煉る再造
　橋源ふ平みそいめづ〜さ橋ふまぐ土俗大橋あるひい一橋かどりふ又俗称和ある
　ゆえ費をとらふ
　　称名院右府記
　　二月二日ふ〜くぐりはくとて
　　ふくふち橋くちわくくく

○神谷辻　茶屋軒と呼び入口ふ長屋隠居所と茶屋と茶屋と屋と造る　花盛市庵　冷泉宗家卿　酒家　酒屋と称ひ　文章　今和宗祖　神谷村なふ　神谷　山樵　化ロ　一日一樵　中ふ　世世界　百の楽　文巻　太平酒

寛延四年春　戸部尚書宗

○卒都婆木　たゞ分の谷ふあり　叙静

○四す岩　或い蟻関ともいふ

此岩四ふ〳〵絶ふ人を通ど中ふ巻　四すぐりの足跡

似〳〵るこの一所あり往来の人隻脚と称ふうみぐ〳〵ば歩むう

なりぐ〳〵故ふ也人作〳〵紙の足跡を著むしるべ　おろかせう

馬など通つるうるがとさまで別ふ馬道あり古のあるう

屋桟あるて難所なり又櫻樹多〳〵

称名院右府記

おの〳〵めびのよろひ〳〵

〳〵今見まさかなる木やけ〳〵折〳〵るる中ようの

ほあるくるを右を山たそ〳〵ふ谷いもとうせもえ〳〵

おろしとかるまるふ避面の陵をすくるん絶も

〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵　卓池

○不動搗　不動坂の谷川ふ紀を

是より山上までを不動坂と

名づけ〳〵旦往古より谷介梯ふ入れ〳〵すをゆるぐまどろ

只古柏老杉のみ蔚〳〵として雖を立づさ地なく遠く是を

ゆめ〳〵山の形象俗所謂釋迦頭の〳〵

称名院右府記

二月二日　ふりかゝるかつろ坂不動坂などき〳〵

四寸岩

鶺鴒の小尻とゝの巻
四寸岩
貞佐
廣隆

不動坂口
女人堂
女人堂
塊亭

女人堂
菴室
不動堂

ろもろ〳〵くひあつまりて物もかなぐしばり〳〵して
ろぐろぬ
山繒ゐこゝろあるとゝ山人の業わろとこゝ車ともろ〳〵ふさ行んる　放鵬子

○萬丈轉（外の方の勢ひ下一所柳ゐあり）

此度ゐ谷間と窺ふる其深さいくばくといふ事を知らず
本草枝を〳〵交つて色なれごとく〳〵雪中ふい人の泥て
ゐち〳〵むすと恐れそのとうれ備ふとて檻をまつくゐてを
萬丈時と名ぢけ〳〵山内〳〵手頼の族を執へ手足手
を志もとふ結付〳〵追放する所なりとて其血法曳の刑兵器を
用ふ至ぐれども罪人ふ族て手遣責の器なりとえべ〳〵

○外の不動（堂中ふ安置ゐ堂殿大師の彫像なり）

金剛庄野寺家久入道ゐ再建す　威霊拝者の願を満ぐ堂殿大師の草創なり寛文年間備前國上道郡

○岩不動（路傍の岩ふ不動の種子あり）

大師の御瓜鑁なりとゝ

○兒瀧（花折坂の下ふあり）

むゝ〳〵児の捨身せ〳〵所といひ傳へ下帯の清泉積翠萬疊の
中ゐ流出〳〵ふ至〳〵直下千尺珠砕け玉踊る天工言
語の及ぶ所ふあらず

○花折（女人堂ゐ）

参詣の諸客此所ゐて花と折〳〵大師ゐ捧るもいう又をゐ
れぞ手ぶさふ〳〵ゐるそなゝ〳〵三世の佛ふ花〳〵そまつるゐ
〳〵ひてゐるもあり

○女人堂（諸国ゐ参詣の女人投宿する所なり七口
各堂あり〳〵へゐと此堂最大なり）

當山の内院ゐ女人と禁ずる事古詳論あり今昇ふ陳ずふ及ま
ぜ〳〵こどもいとゐ女児の為ふ一端と述む惟ふ大師豈婦女
と忌み給んや至詰記ふて女いあま万姓の本氏族と廣め
家門と繼とのまへゐ姪とどと是と親近する時ゐ互ふ視

聽の慈ふ誘ふ事て貞良如法の弟子とゝ人どと意外の
過ちとふ〜を行〜ど故ふ是と親むと雖とも諸悪の
根元嗷々の本かゝと示〜るもへ旦弘仁聖主の勅ふも
男の尼寺ふ入る尼の僧院ふ赴くゝと制〜ゝ迷源と
塞ぐ慈根を断つ聖慮祖意の深さ所ゝ厚を察知寸
〜若有信の女子一度登詣〜そ去の堂ふ宿〜遥ふ
伽藍と拜禮〜合絲聚塵の微貨ふ抱〜次随分の功
徳を修せ〜良縁ふ因〜忽長夜の迷室を出〜永く
一真の覺殿ふ入む事うゝ〜ぐべ〜〜〜

千首　山女郎花

さゝうあう花は名をそう女郎花　師兼

白河七百首　野亭女郎花

麓む千人高地の秋乃を〜ふ〜〜〜〜〜〜〜〜　融覺

狂歌集

花ふゝ〜名ふふ〜〜〜〜〜〜〜〜

高野山山をうゝきちみ嵩ゞ根の凝數みちとかゝ
くふゝみつゝゆけゞ茂る揖の木れ間の棚曳る
雲の万四と機の穆ゝ きゝ ゞゝ ゞゝ この山の
林をうゝみ今もうゝと雪ゝ 冴まる山の梢をる
ミ時ゝうふゝうかゝれ雲ゝ風ゞはらゝむ雲
なゝゞ照日ゞけゝむ照日ゞゝ輝ゝ風のむゝあやふ
ゝ生ゝゝゝ

苍折
児滝
西行ケサカケガラ
児タキ
六月晦日
大てうふ
児の滝
ちか
栩斎

其二
花折
不動
笠打て
も聊
ひの出ぐ
さびや
る打りて
ち作
蘆斎

其三
外の不動
万夫轉
不動橋
馬道
父母の
恋しぬる
絵ゑ
鬼蔦

不動橋
不動堂
廣隆

四寸岩
とどざき
平都婆木

其四

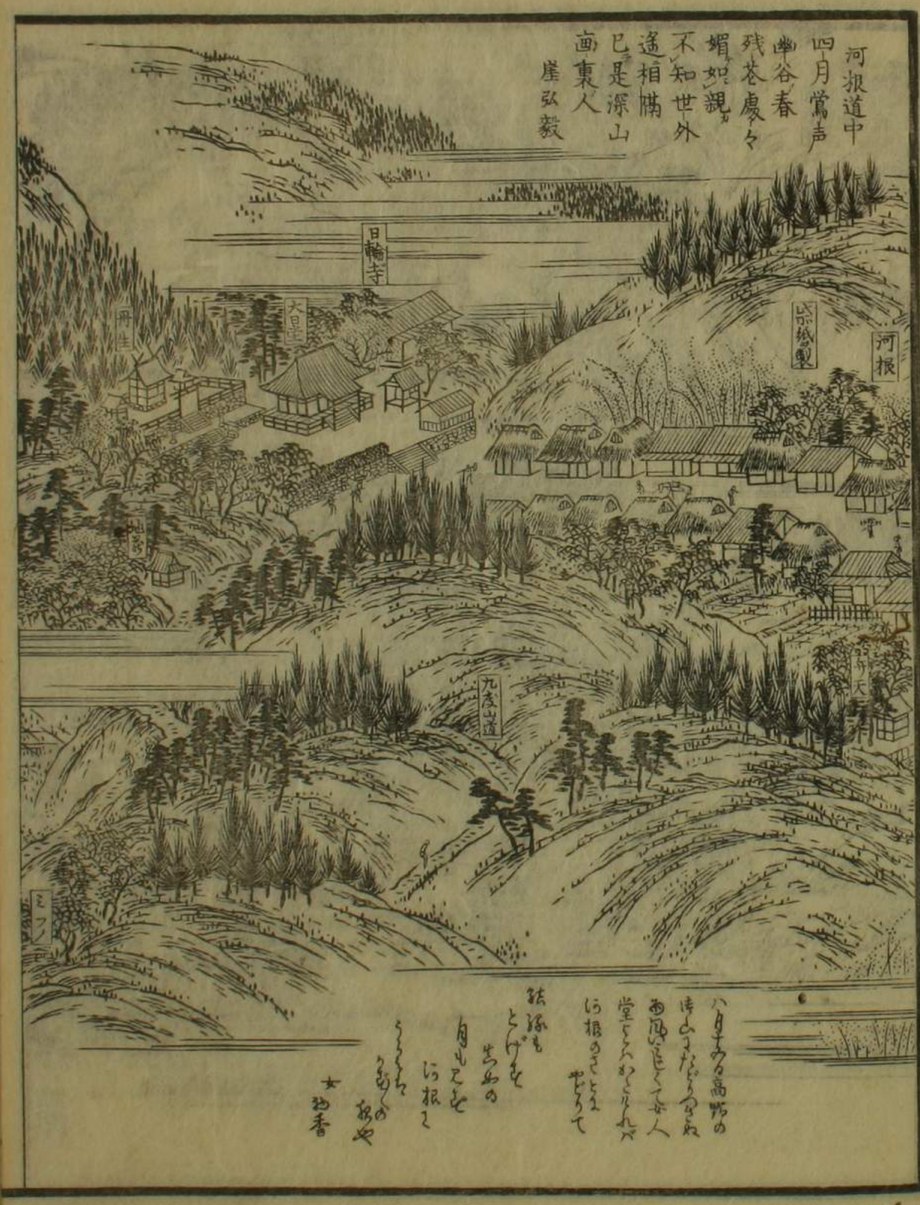
其角

其九
櫻茶屋
神谷辻
神谷客亭
重豆青虹卿医新
草鞋来往息観辛
南山拾剣三十院
牧潭雲間送旅人
伊藤海嶠

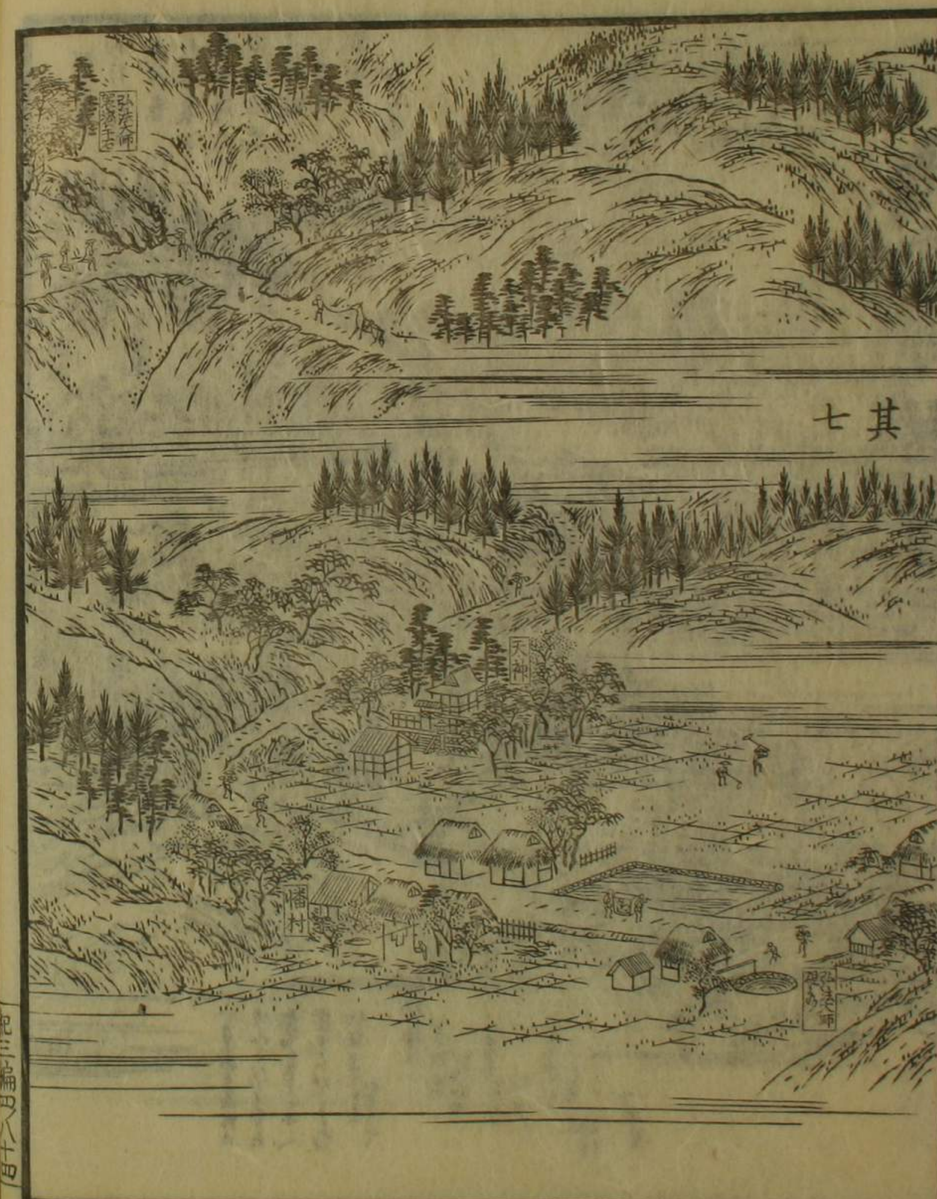
其六

河根村
千石橋
塩竈古跡
日輪寺

河根道中
四月當声
幽谷春
残苔處々
蝟如親
不知世外
遥相隔
已是深山
画裏人
崖弘毅



大師硯水
苅萱堂
春天
天神
廣隆


其七
天神
幡村

其八

學文路

西光寺

物狂石

過學文路村

行路崎嶇倦水危
筍輿不穩兩肩差
僊源恨求探春盡
正是芳山花發時

海嶠

玉皐

高野山のぼりといへる歌ふく

我妻ふるめる長歌　　御長盆宮

さへづる傘紙の名ふかす高野の山を歩けぐ
佐夏の都ぞ紙自物ふたくを剛さ荒雄もまじ
目ふまわり粘自物うねるかくねる巻人もつまさみぞ
のぼるとて佐りの刷毛神ふと行めぐる眼を空なし
しく繰の空の八塚をうたで弥高ミ瞻をつぶ佐く
佐こ来つる風さへさめぬ魚せまめうつ供を竭の座く
らき谷空をこうたバ弥遠ふ曽もとぞ佐さそひこみし
腹さへ空りぬうくだこり尊さ山を空編り佐雲を
ちぐちし山ふ寒くも空りぬいざ荷持見を眷
ぬめり表光る空尾ふ行く供直を雲

紀伊國名所圖會三編巻之四高野山之部上　終